

レーニン主義的前衛党を 建設せよ！

＜目 次＞

- ☐ 組織内部の日和見主義を一掃し、
10. 8 羽田へ全国から総結集せよノ (1)
- ☐ レーニン主義的前衛党を建設せよノ (11)
- ☐ 日本共産党第11回大会
決議案を批判する (27)
—— レーニン組織論からの袂別 ——

マルクス主義学生同盟・中核派

組織内部の日和見主義を一掃し、

十・八羽田へ全国から総結集せよ！

A 革命の現実性にふまえて、組織原則の確立のための闘争を遂行せよ

(イ) 意識の転換をからとれ

九月口日の全都支部代において、われわれは、いわば十回大会の実践的結論である組織的整備の問題についての点検と討議を行なった。その核心的問題とさらにそれを今日の情勢との関連の中で、いかに実現していくべきなのかについて提起したい。

今日の課題の核心は、何よりもまず、日韓条約の締結を通して日本帝國主義はその帝國主義としての本性をむき出しにして人民の前にその狂暴な姿を登場させた——これがわれわれにとつての一切の前提なのだということに深刻に換えることである。

すなわち、今秋の余りにも多くの闘争課題（訪米、訪米、沖繩、エンタープライズ、砂川、三里塚、新島、授業料、小選挙区制、朝鮮大学etc.）にわれわれが耐えぬけるか否か、こうした攻撃をうちかえして、真に七〇年安保に登場しうるか否か、このようにのみ問題が設定されているということである。

そしてこれに対する解答は、ただ次の点にある。

攻撃の狂暴化——それはわれわれにとつては革命の現実性として

把握され、その現実性に前衛たるべきものが同盟がどう応えなければならぬか、そしてその現実的保障としての組織はどうあるべきか、である。

マル学同中核派書記局
一九六七・九・一六日第三号

一九〇二年のレーニンが党の分裂をかけて闘った組織原則の第一案をめぐる問題は、今日われわれに深刻に問われている問題でもある。明らかに具体的政治情勢から離れた一般的組織問題もありえず組織的現実には媒介されない政治方針もありえないという問題をわれわれに提起しているのである。

九回大会—十回大会に表現されているわが同盟の若惱と克服の過程の根本こそ、この革命の現実性という問題にどう応えるのかということより他ではない。九回大会の重要な意義はまさに迫り来る革命の現実性のなかで同盟が重大な意識の転換を迫られているということを開題として提出したことなのであり、問題として提出という点で実践的解決の方針を見出すことができたかつたがゆえに混乱を生み出したのである。

十回大会は不十分ながらも、この点に組織論の問題を提起し、革

組織の意識性を解決の方向に設定したのである。
この設定の決定的重要性は次の点にある。帝國主義的重圧の前に

はプロレタリア大衆の一般的不満の拡大こそあれ、具体的爆発はそれ自体としては殆どありえない。そこでは、革命党の意識性指導性以前衛性において攻撃の激化は革命への現実的蜂起の組織化として問題になるのだ（攻撃を攻撃として敏感に扱え、いかなる弾圧があろうと闘い抜くという部隊がいなかったら、大衆は動きようがないからである。）だから、革命は革命党の問題として主に論じられることが必要なのである。

十回大会が実践的結論として、組織的再整備は革命にむかつてわれわれがその主流派として登場することの明確な目的性に支えられて、今秋の闘いを死にもひるんで闘い抜くことの不可欠の要諦なのであり、逆に、それをやり抜くことの中においてのみ、今日の抱えている組織問題の解決は与えられるという意味で扱えなければならないのである。ただし、政治問題を離れての組織問題はないからである。

再び確認するならば、帝国主義的攻撃の激化の前に、革命的登場をわが同盟がなしているか否か、そのための組織的飛躍は何かのかわき問題はいくら立てられているのであり、われわれの闘争の軸はここ以外にない。

同志諸君、革命の現実性にむかつて意識を転換するために闘争せよ。

(ロ) 組織原則の確立から始めよ

「……わが党にもつとも厳しい、真に鉄の規律がなかったならばボリシェヴィキは半世紀の前半はあらず一月半も権力をもちとえられなかつたらう」「プロレタリアートの革命党の規律はなにによつ

て現実問題をプロレタリアート解放の契機とみなすことを意味する」
（ルカーチ「レーニン論」）

組織的規律の問題は共産主義者として、自己を委身する問題であると同時に、徹底して自己と組織を革命の前衛として鍛え上げるということに他ならない。なぜならば、革命はどんな意味においても、表現されることにおいてのみ意味をもつものであり、革命に向かつてあらゆる行為、行動は集約されなければならないからである。組織的規律は、従つて、革命をやらずには自己解放できないというリバトスを基礎にし媒介にしなから、自発性の内に包摂し、自己の感性において把握できるようにならなければならないものとしてあるのだ。

組織原則の確立は、革命の現実的遂行にとつて第一の課題として設定されなければならない。これなくして、帝国主義的攻撃を革命へ転化すべき革命党の意識性は全く保障されないのだ。実践的唯物論としてのマルクス主義の根本的環は、組織原則の確立による革命へ向かつての党の徹底した意識性以前衛性にあるということができるのである。

組織原則の確立、これのみが今日の同盟の一定の停滞を前進的に突破させるものなのである。

組織原則の確立のための闘争を直ちに着手せよ！

(ハ) 実践的指針

組織原則は次の三点に集約される。①同盟の会議を定期的かつ定期的に開催し、同盟員はいかなる理由（たとえそれが武装蜂起を指導している人間であつたにせよ）があろうと全員参加しなければなら

てたもたれるか？：第一にプロレタリア前衛の意識、革命に対する献身、その忍耐、自己犠牲、英雄主義、第二に、彼がきわめて広汎な勤労者の大衆、まずプロレタリアの勤労大衆と、だがまた非プロレタリアの勤労大衆ともむすびつき、彼らに接近し、必要とあればある程度まで彼らとけあう能力によつてである。

第三に、これらの前衛がおこなう政治的戦略と戦術のただしさによつて、彼らの政治的戦略と戦術のただしさによつてである。——ただし、これはもつとも広い大衆が自分の経験にもとづいて指導のただしさを納得する条件のものである。（レーニン「左翼小児病」）このレーニンの党組織に関する洞察とその実践こそ、彼およびボリシェヴィキをして革命の主流派として登場させ、革命を現実に行させた真の力の根源なのである。彼が何ゆえに、第一の鉄の規律を問題にし、献身と忍耐と自己犠牲を問題にしたのかに核心的問題がある。これをプラグマティックに理解してはならない。

「革命の現実性、これがレーニンの基本思想であり、そして同時に彼をマルクスと決定的に結びつけている点である。なぜならプロレタリアートの概念的表現としての史的唯物論が理論的にも把握され定式化されうるのは、その実践的規定性がすでに歴史の日程にのせられた歴史的瞬間においてだけだからである」「革命の現実性が一つの時代全体の基調を規定する。」

社会的・歴史的総体の精確な分析によつてのみ見出すことのできる、この中心へと個々の行動を関連づけてはじめて、個々の行動が革命的なものとされたり、あるいは反革命的なものとされたりするのである。革命の現実性は、したがつて、あらゆる個別的な現実問題を社会的・歴史的総体の具体的関連において取扱ふことを、また

なすこと。

②機関誌を買つて、必ず隔から隔までキチンと読み、討論に付すこと。③あらゆる支出に先立つて同盟費を定期的に納めること。

一般的確認においてこれらを終らしてしまつてはならない。恒常的に、断乎として何処でも最後まで、自分との闘争を含めて闘争しなければならぬ。それが習慣化され、自発性が高まるまで、自分自身を教育し、同盟内部を教育しなければならぬ。

これがつくり上げられないならば直ちに腐敗と官僚主義が発生するのである。断じて逆ではない。なぜなら、会議への参加なくして方針は自分が決定した方針たりえない。

機関誌を読むことなく同盟を自らのものとしえない。同盟費を払うことなくして同盟を自ら支えることがないからである。さらに問題を提起するならば、召還している同志についての問題は、この組織原則をなにかなんでも守らせるところを第一の闘争課題として設定しなければならないのである。

それは、組織原則を守りぬくということの中に革命へ自己を賭けるということが現実化するものであり、それ以外ではないからである。それは何ら党を絶対化したり、物神化したりすることを意味するものではない。会議が全体できちんとたれ、機関誌が正しく評価され、同盟の活動を支える財政が確実に保障されることの中に、同盟が正しく運営され運動を行なう基盤があるからである。

問題は、まさに組織原則を断乎として守りぬくか否かに、同盟の正しい発展の保障はその基礎を持つていふことなのだ。一切の妥協と日和見主義を排し、組織原則を実践せよ！革命に向かつての同盟の飛躍は、まさに今、この一点にかかつていふ。

B 一〇・八羽田闘争へ全同盟をかけよ

(イ) 政治的位置づけ

先にも述べたように、今秋一挙に爆発しようとしている日帝の攻撃は、狂気じみたものすごくである。闘争課題を並べてみただけでも十指に余るすさまじさである。しかもその質は、極めてブルジョアの本性をむき出しにした露骨なものである。日韓条約締結を勝利した日帝はいま、七〇年安保に向かつて、帝國主義の存立を賭けて、必死の海外侵略と国内的強権支配の道を同時に遂行しつつあるのだ。佐藤の二度にわたる東南アジア歴訪と十一月の訪米は、その真の目的を、アメリカ帝國主義とのより一層の固い同盟を確立することを通してベトナム戦争として具体化している帝國主義支配体制の動搖と崩壊に対し、敢て自らをその激動の前に立たせる点にもついている。まさに帝國主義としての自己を維持していくためには、動搖し激動する東南アジアに支配者として登場し、これらを自らの支配下に獲得することによつてしか活路を見出すことができないのである。

それは日帝をして、帝國主義世界体制に固く結合せしめ、帝國主義体制の維持のための深刻な主人公として自己を登場せしめざるをえないという歴大な任務を負わされているのである。

こうした日本帝國主義は、不可避に背負わざるをえない外的強制によつて生じるあらゆる矛盾を、死にもの狂いで解決せんがために一切の犠牲を人民に転嫁し、自らの生命を延命しようとしているのである。

無制限の使用の權利を確保することが両者の利益の合致点である。それは、従つて安保条約をはつきりと核安保として実質を保障するものなのだ。しかしながらそのようなことの維持拡大に対し、沖縄県民の闘いは、日米両支配者に対して恐怖を抱かせる闘いとして現実化している。

まさに、この矛盾の集中点における沖縄県民の祖国復帰の闘いは、本土プロレタリアートの日米両支配者に対する闘いと固く結合することによつて、七〇年安保を爆砕し、沖縄の本土復帰をもちとり、日米両支配者に対する決定的痛打となるのである。われわれが本土プロレタリアート人民の本土復帰・沖縄永久核基地化粉砕をかちとるための闘いに決起するを否かは、七〇年安保を決定するものなのだ。

さて、佐藤の訪ベトナム・訪米がすでにのべたように徹底して自己を帝國主義の延命にかける目的を鋭くもつていているということは、国内の強権支配への着手と分ち難くむすびついているのである。

国会デモへの首相の指揮権発動はきわめて鋭角的に「異質な」攻撃をわれわれにかけてきたといえよう。しかもそれは今日恒常化されようとしている。朝鮮大学の認可に関する文相の指揮権発動の警告の姿は、単に朝鮮大学にとどまることなく、全ての大学に対して、文相がその存在の全権限をにぎりしめようとするきわめて激しい攻撃なのだ。同じような事態はこれにとどまらない。高経大に対する市当局の牙をむきだしにした大量処分、自治会そのものをぶちこわし御用自治会（＝第二自治会）デッチ上げの策動、群大東学大においても自治会破壊の大量処分が企てられようとしているのだ。

いまや、極めてはつきりと日帝の攻撃の根本環が浮かび上つてき

これらすべての流れを七〇年に向けて一大条約し、日帝は帝國主義としての一定の段階をとにかくも越えようとしているという時点に現在立っているといえるだろう。

更にいうならば、日帝は歴大な攻撃をかけた階級的のりきりをはかりつつ、ますます帝國主義世界体制における主人公（目下の、ではあるが）の役割を高めながら、従つて極めて深い矛盾を再生産していくという帝國主義としての腐朽性を露わにしているのである。

七〇年安保再改定は、参戦国化・核安保という形態をとつて、鋭角的に激動の世界に米帝との固い同盟を通して、確実に登場することを目標としているがゆえに、日帝にとつては死活をかけた一大決戦として位置づけざるをえないのである。

このような七〇年安保再改定の決定的重要性を一つの焦点にして、今度の佐藤内閣のベトナム訪問と訪米は位置づけられている。

ベトナム訪問と訪米は事実として、参戦国へと踏みこみ、アメリカ帝國主義との関係をさらに確定的なものとして作りあげようとするものである。佐藤の訪ベトナム・訪米は七〇年安保への狂暴な一歩を突き進むことになるのである。

ここに一〇・八闘争がもつていた決定的意義があるのだ。参戦国への出発を徹底した人民の闘争による抵抗で佐藤を恐怖の淵にたきこまねばならぬ。

ところで、七〇年安保を決定する大きな要因は、一方において沖縄問題がある。沖縄があるからこそ、今日安保条約は決定的な意味をもつていえるといえる。日米両帝國主義にとつて、沖縄を今日東南アジアを中心としてまきこめる反植民地主義の闘いへの徹底した橋頭堡として、沖縄の永久核基地化と、法制上の不明確さによる自由

た。それは、闘争の母体となるべき自治会・労働組合の買収、もしくは破壊を全面的に開始しようとしていることだ。

今秋、出されようとしている授業料値上げは、その政治的意図を一色に自治活動の破壊の全面的攻撃に染めている。まさに問題の核心は、一切の反対運動の組織機関を根こそぎなくすことなく、支配を貫徹しえなくなつていふところにあるといふことである。このことだ。

十月に最終答申がなされようとしている小選挙区制はまぎれもなくそれを示している。一切の民主的ヴェールをかなぐりすて、一党独裁の体制を強固にうちかためようとしているのである。

反対派を法的にも、さらに実質的にも規制し、あわよくば破壊をねらっているのだ。

日本帝國主義者の帝國主義者としての本性は、帝國主義の深刻な主人公としての役割を果たすことのために、いま、あらゆる国民的不満を封殺しなければならなくなつていふのだ。そして、それは七〇年をメドに急ピッチで進められつつある。

であるからこそ、一〇・八羽田闘争の爆発は、限りなく日本帝國主義者に恐怖をなげあたえるものである。

したがって、ますます、全国から総結果をかちとり、一点——羽田に全力を集中しなければならぬ。

こうした日帝の死活をかけた攻撃のすさまじさのなかに、闘争の爆発をなんとかして食い止めようとする部分が必死に登場しようとしていることを看過するわけにはいかない。スターリン主義反動の暴力的登場である。彼らの夏の全学連大会で決定した「学園から暴力学生を排除する」路線が九月に入るや急激に各大学で実施され始

めたのである。それは単に、学生戦線段階の問題ではない。八月に入つてからの「アカハタ」の連日の反トロキヤンペーンは現在ますます必死の度を加えている。TBS放送の全文掲載や、東原手記の掲載をやつてはばかりではない。「イスト」や、はては「前進」の古いバックナンバーまでたんに読んで、真正面からわれをたたきのめす方針をはつきりと構えている。「文化評論」ではハンガリア革命の総括を「前進」を批判しつつ展開されているのである。埼玉大学においては、官僚自治会をつくり上げるための現実的に大衆的反対の声が上がるや、反対闘争の先頭に立つわが同盟の中核部分に対し、地区党員の大量の動員をはかつて徹底したふくろたたき、リンチが加えられている。はては反対派活動家で学園に入つてくるのを阻止するために門の前に数十人の暴力要員を配備する有様である。処分反対闘争を闘う東学大においても、バリケードを右翼と一緒になつて破壊し、活動家に対し暴力的に対応している。さらに決定的な段階に、彼らのトロ排除路線を押し上げその反動的姿をはつきりと示したのが今回の法政大学における問題である。

わが同盟をはじめとする反日共系活動家六名に加えられた処分は、そもそも教授会と日共「民青」の法政の細胞・支部の結託した結果としてなされたものであり、彼らのトロ排除路線の完成された典型的実践として行なわれたものである。われわれの手に入れた彼らの細胞会議の議案には、東京都段階において、法政、明治、中大を拠点校として設定し、反トロ路線・トロ排除路線をあらゆる方法を用いてやりとげることが明記されてあるのだ。法大の今回の処分がすでに一月以前に日共細胞会議の議案にのつており、カモフラージュのために党員の一名への処分（処分にならぬ贖買）を容認するとい

うよりな有様なのである。二百八十五名逮捕の官憲導入についても極めて露骨な彼らの反動的姿を明らかにしている。「総長救出」というスローガンを掲げて、不当処分撤回要求の団交に対し、暴力的に介入して会場を混乱させようとはかつたり、欺瞞的に「官憲導入反対」を叫びながら、実際に官憲が導入されるや文字通り無傷のまま横で見ているという有様である。そして「官憲の導入は暴力学生集団が原因」というキャンペーンをまきちらして学内を掌握しようとしてたが、残余部隊の必死の闘いによつてそれが不成功に終わるや、学内から姿を消し、裏で何らかの次の対策を練つていくという具合である。東学大の処分闘争などでも、「暴力学生」の処分は当然民主勢力への処分反対」というビラを、多摩地区の各駅でまくなどという驚くべき姿として登場しているスターリン主義反動は、法政大学で大規模な策動を行ない、学校当局と国家権力の自治破壊工作に大きな手を貸しているのだ。あらゆる方法とはまさしく、自己の党派をまもるためにはいかなる事態が起つても、トロ排除を貫徹することが必要だということなのである。

こうした日共スターリン主義反動の暴力的登場は、第一にによりも由派からの離反ということに象徴される。帝国主義の攻撃の激化の中にいかにして自らを守りぬいてゆくかという要因によつて構成されている。四・二九評議員論文は、徹底して帝国主義との闘争を回避し、党勢の外延的拡大（「アカハタ」の第一面は必ず拡大目標の達成の記事で構成されている）と議会への拡大の自己目的化の論理的定着であつた。しかしながらこうした帝国主義との闘争の回避は、春の砂川闘争における決定的敗北を生みふとし、中国といふこれまでの権威による内部的な精神的な統制が崩壊しているな

かで、党勢の拡大が拡大にならずに、内部固めに追いまくられるという状態をつくりだしたのである。

こうした党内の矛盾を、トロツキストの排除という「目標」を与えることによつてまとめ上げ、七〇年に向かつてますます激化する日帝の攻撃の中に闘う者の指導による大衆的憤激をおさえつけ、自らをなんとかして延命させようとする路線が、今日の日共の総路線なのである。

逆にいうならば、トロツキストに対する暴力的攻撃による党内の一定の分子の動搖をあえてつくりだしても、闘争の爆発による党の分解を回避することを極めて高い目標として設定しているということなのだ。七〇年を一大集約点として、闘う翼総体が七〇年安保へ準備を開始したことに対し、帝国主義との対決の回避（対決しないで党勢拡大を選挙によつて表現することによつて革命に到るという願望ないしは展望）の大原則を守りぬくこと（「党派としての日共の生命線」を必死に開始したということ——これがトロ排除路線の本質である。

従つて彼らはそれを死活をかけて遂行しつつあるのであつて、その攻撃はわれわれに対して、実体的にも消滅するといふ「せん滅」の路線として現象するのである。

帝国主義の決定的腐朽化の度合に依じながら、スターリン主義反動はその反動的な本質を死活をかけて遂行するという問題として、われわれはこうしたスターリン主義の反トロ暴力路線を把握せなければならぬのである。

しかもそれは、われわれを主要打撃目標にしているのであつて、単なるスターリン主義の反動性の暴露（反帝・反スターの正しさの証

明）に矮小化してはならない。問題は、われわれにとつて、組織の存否をかけて彼らとの闘いを闘い抜いて勝利してゆくことが、七〇年を前に絶対的な問題として切実に問われているということに他ならない。単なる批判家としての段階を三全総路線の深化を通して大胆に突破してきたわれわれは、いま日共スターリン主義者との組織をかけた全面的対決を、革命の主流派として登場するために、断乎やり抜かなくてはならない段階に達したのだ。反帝・反スターリン主義の真諦がいま問われているのである。六〇年安保闘争における日共との闘争とは比較にならぬ重圧をもつて、いま問題は提起されている。

こうした帝国主義の闘争母体の根底をも破壊しつくす攻撃の激化と、スターリン主義反動の闘う現に対する暴力的襲撃の開始はまさに、われわれをして、真に革命を担う徹底した指導性・前衛性と、組織的力量の飛躍を問うている。こうした党的力の巨大な前進を抜きにするならば、帝国主義者の攻撃の前に、そして階級内部の破壊者の策動に対し、プロレタリア大衆の圧倒的不満の存在にもかかわらず、闘争そのものが起こしえない状態をつくりだすことは目に見えているのである。

今秋後半に予定されている国・私大の授業料闘争は、単純に爆発するなどと考えるならば、大きな間違いを犯すであろう。

同盟の飛躍的拡大をかけた闘いの遂行なくして、一切の闘争はもはやありえないのだということを深刻に把握しなければならぬ。

こうした極めて深刻な情勢の中に、一〇・八闘争は設定されている。従つて、単なる五・二八闘争の再現ではありえない。それはわれわれにとつて、革命の前哨戦としての位置を不可避的に与えられ

ているのであり、この闘争に真に革命的な主流派として登場するか否かに、以降のわれわれはかかっているといえるのだ。

極言すれば、一〇・八を、革命組織として死ぬか生きるかの闘いとして、同盟をかけて闘い抜かなければならぬのである。

全ての同志諸君、一〇・八のこうした深刻で巨大な意義を自らのものとして、全てをかけて闘いぬこう。

安保、一・一六羽田闘争を想起し、全ての力を羽田へ！
九・二〇をステツプとし、試験や秋休みをフルに動き、一切の力を一〇・八へかけよ！

(ロ) 組織的位置づけ

帝国主義反動の嵐が荒れ狂い、闘争主体の内側からスターリニストの破壊活動が闘争の爆発を必死に抑圧するといふ、徹頭徹尾反動化しつつある情勢がわれわれをとりまいているとき、真にこうした歴史の最終局面を革命に向かつて大きく切り開いていく力は、ただわれわれの党的力の飛躍（あらゆる面における）を描いて他にはありえないのである。だからこそ、われわれは徹底的に自己を前衛として鍛えあげることが要求されているのだ。

aの項ですでに除べてあるように、いまやわれわれにとつて、根本的な組織へのかかわりの意識の転換が必要なのだ。その現実的保障こそ、組織原則の確実な定着なのである。

一〇・八闘争の政治的位置がわれわれにとつて、あらゆる意味で同盟の革命性を問うているとき、一切の日利見主義、小ブル意識との闘争を非妥協的に貫き通し、組織原則の貫徹をかちとらねばならない。その貫徹の作業を遂行することなくして、闘争における指導性をかちとつてくることはありえないのである。しかも、情勢の重さ

一〇・二一のことについて云々すること以前に一〇・八に同盟のすべてをかけることだ。全同盟が全て逮捕されることを覚悟して、一〇・八闘争に突進しなければ一〇・八闘争は爆発しないのだ。後述のことは要するに、一切を一〇・八闘争へ注ぎ込むこと！
一〇・八闘争をかちとることによつて初めて今秋の闘争は大きく展開せしめられるのだ。二〇・八に全部、全国からわれわれの独自の力で五千名を集結し、羽田空港へおしよせよ！

(ハ) 実現過程

一 同盟の一切のカギは同盟が決定することだ。前期試験とその後の秋休みという悪条件の中で爆発をかちとるためには、全同盟員が決意を固めることがますます重要である。

二 試験放棄を決定する人間を最大限につくりだせ。試験放棄するなどということはナンセンスである。試験が受けられればまだましだと考えよ。同盟内の徹底した闘争を絶対に行かない同盟員が勝手にバラバラと試験に没頭し、同盟機能がまひするなどという事態を絶対に作りだしてはならない。試験中は学友の全てが参加するときなのであるから、宣伝・煽動の活動を計画的に行ない、徹底的に大衆を獲得しなければならぬ。

一九六三年の横国大の一〇・二四ストはこうした活動の結果として成功したのである。これを教訓化せよ。毎日朝ヒラをまき、試験の始まる前五分間、全教室をアジテーションで埋めつくせ！
三 宣伝を計画性をもつて多角的に、しかも一〇・八に集中するようにつとめよ！

日帝の攻撃の多面性を暴露し、しかもそれが、一〇・八を突破口

は、われわれによつてのみ、われわれの指導性の貫徹によつてのみ、革命的に切り拓くことができる段階に立ち到りつつあるということ

なのである。大衆の自然発生性を期待したり、あきらめたりすることとは、革命的指導部が前提的に意識の内部から断ち切らなければならないのである。あくまでも自らの動きかけ、指導性において大衆を闘争に組織するのだという観点を強固につかんでおかなければならない。それを保障しうることでこそ、いかに忙しかろうと組織を組織として機能させることだ。その一歩が組織原則の確立に他ならない。闘争の開始は前衛が切り拓いていくのだということを把握せよ。

日共との激しさを増す党派闘争は、今秋の授業料闘争に向かつて一段と深まっていくことは間違いない。この闘争にうちかつことなくしては授業料闘争はおぼつかない。ましてや、七〇年安保はそうである。前述したように、この党派闘争は直接的に組織と組織の対立・衝突を意味しており、われわれは、組織の飛躍が破壊力という極めて鋭角的な問題として把え返す必要がある。従つて、彼らが徹底的に日和ろうとしている一〇・八（彼ら日共は十月八日、赤旗まつり、をやるのだ！）に決定的な差をつけ、活動家を大量に獲得すると同時に、その組織的な掌握を行なうということが彼らとの党派闘争に勝利する決定的なカギだ。この一〇・八闘争の爆発なしには、一〇・二一も授業料闘争も、従つてありえないのである。しかも、この一〇・八闘争の組織過程において、きびしく組織的整備をかちとることが、一方において絶対不可欠な条件である。組織がきちんと機能しないところで、日共との党派闘争などはじめから勝負がついていくからだ。

一〇・八闘争に組織の飛躍の強化をかけて全力投球せよ！

として狂暴なすさまじさで実施に移されていくことを訴え、一〇・八へ結集し、佐藤の訪ベトを阻止することの決定的重要性の確認に集中せよ。これができるためには、絶対に組織の会議で「前進」を徹底的に読み込むことが必要である。

IV 煽動（アジテーション）を確立せよ！

日帝の今日的な姿を事実において明確に暴露し、徹頭徹尾自己の怒りを大衆にたたきつけたければ、学生大衆の心をとらえることはできない。九回大会において問題にした大衆の直観を「生きた直観」として把握し表現することの実践が、このアジテーションにおいてつくりだされなければならない。まず何よりも自らの怒りをかきたてよ！徹底的に怒りをかきたて、学生大衆にたたきつけよ！

V 行動提起を適当に配置せよ！

活動者会議、討論集会等々大衆的たたかまりの度合に応じて提起し自らのもとに組織し、クラスにおける活動家へとつくりかえてゆくことを意識的に行なえ。

VI 試験休みに下宿まわりを意図的に行なえ。

VII 羽田へ根こそぎ動員せよ。バスの手配やバス券売りを直ちに始め、一人もこぼれることのないよう組織的に日々点検して、一〇・八への動員計画を達成せよ！

VIII 日共の一〇・八赤旗まつりを暴露し、その徹底した帝国主義者との対決回遊の姿を糾弾せよ！

○一〇・二二全国ゼネストの展望を直ちに打ちだし、一〇・八一〇・二二の波の組織化を急げ

(イ) 政治的位置

総評が闘争を戦術ダウンする一方、国労が立川駅の立川基地への引込み線を占領し、軍需物資輸送拒否の闘いを展開するという、反戦闘争史上まれにみる戦術を行使するという点は高く評価する必要がある。砂川闘争との関係もあり、われわれも立川駅の国鉄労働者への支援を断乎として行なう必要がある。

さらにこの一〇・二二闘争が国際共同行動として、アメリカの反戦闘争と一体になつた闘いであることを見逃してはならない。アメリカの黒人反乱をその頂点としている反戦闘争に、われわれは応えなければならぬ。ベトナム反戦の一つのエポックをなす闘争となるであろうことは間違いないところだ(こうした二つの点を強調するにとどめるが、「前進」等を通じて、その政治的位置の重要性につとて把握を行なつて欲しい)。

(ロ) 組織的位置づけ

ゼネスト方針を提起する。拠点大学はむろんのこと、各大学・各支部の最大限の闘いを可能な限り追求することが必要である。

しかしながら、それは一〇・八闘争に余力を残しておくということではない。それは全く逆だ。一〇・八闘争を同盟の全力をかけて闘い抜くことによつてのみ、一〇・二二ゼネストの実現はその保障を与えられるのである。一〇・八の爆発による情勢の流動化を待ち

とらずして一〇・二二を実現することは困難である。逆転した思考を排し、階級闘争のダイナミズムを理解せよ。

(ハ) 実現過程

基本的に一〇・八羽田へ総力を、その力で一〇・二二ゼネストをというスローガンを活動家に今から一般化せよ、ということにつきる。あとは一〇・八における実現過程と同じである。ただクラス討論―クラス決議―学生大会のやり方に注意を払う必要がある。

1) 法政大学処分撤回闘争に全国からの支援を(マル学同法大支部のビラ参照のこと)

国家権力、スターリニストから法政を防衛せよ、
尚、同盟の極点法政大学に動員、激電、及びカンパを可能なかぎり送れ、

レーニン主義的前衛党を建設せよ

はじめに

くりかえしていうと、ロシアにおけるプロレタリアート独裁の勝利の経験は、右の問題を考えることのできなない人々あるいはそれをふかく考えることになかった人々にたいし、プロレタリアートの無条件な中央集権ととも厳格な規律こそがブルジョアジーに勝つための根本条件の一つであるということをはっきりしめした。

この点は、よく問題にされる。だが、これが何を意味するのか、どのような条件のもとでそれができるのか、といった点にかんする検討は、きわめて不十分である。ソヴェト権力とボリシエヴィキに称讃のさけびをおくるだけでなく、同時になぜボリシエヴィキが革命的プロレタリアートにとって欠くことのできなない規律をつくりだすことができたかという原因についても、もっとも真剣な分析をもつとしばしばおこなうべきではないだろうか?―レーニン

わがマル学同(中核派)は一九六二年暮の準マル派との分裂の中からレーニン主義的組織原則をたてたかといって成長してきた。六七

年階級闘争の厳しい試練の中で闘いとられたマル学同(中核派)第十回定期大会は三日間にわたる激烈な討論の中から同盟のボリシエヴィキの再武装の巨歩を踏み出した。

一〇・八羽田闘争による日本階級闘争の転換とその後の破防法的弾圧下の激しい試練に堪え抜くことによつて一層大きな前進をおさめることができた。そのことはボリシエヴィキ的党建設の志向なくして不可能であつたらう。

「革命は密集した反革命を生みだし、それを粉砕することによつて強化される。」一〇・八一―一二羽田闘争は七〇年に向けての支配階級とプロレタリアートの死活の闘いへと事態を一步進めた。サイは投げられた。

もし、われわれが勝利を望むなら―資本に対する永遠の反逆の感性活動(社会同解放派)や徹底抗戦(ブンド)にプロレタリアートの任務を押しとどめるのではないならば―ロシア革命を勝利に導いたレーニンの引いるボリシエヴィキ党の闘いの教訓を徹底して学び、実践しなくてはならない。

アメリカ帝国主義を盟主とする戦後世界体制の根柢からの動揺と日本帝国主義の支配の危機の到来は革命の現実性を眼前に提起しており、同時にプロレタリアートを文字通り試練にたてている。そ

竹 秋 洋

これは前衛組織の危殆として受けとめられなければならない。情勢を先取りした前衛党の武器なくしてこの開始された階級的攻防戦に勝ち抜くことは不可能である。

支配階級から攻撃がかけられてきたときに必死になって闘いを避け屈服の道を一路しきつめて日共「スターリニスト」や労働の極にたたされてはいる社会党からプロレタリアート大衆をときばなら革命に結集しなくてはならない。

結果を見てからしか情勢を認識し得ないブンドや社青同（解放派）が一〇・八——一・一二羽田闘争の過程で無用の存在と化し、闘いから脱落していったのは偶然ではない。

組織論の決定的意義は、革命の現実性の認識をその実現のための実践に媒介する組織の本質的性格に根拠を持つ。（理論と実践とを媒介する形態は、組織そのものだからである。）

運動が成熟しているかないかは、何を為すべきかについて判断なり見解なりが、行動する階級の意識、およびこの階級を指導する政党の意識にとって、抽象的・直接的な形態で存在するの、それとも具体的・媒介的な形態で存在するの、かというところのみ、推し測りうるものである。——ルカーチ（強調は筆者）

今やわれわれにとっては、次のごとく問題はたてられている。すなわちいかなる党を創るのかである。又、同じことだが、いかなる組織的実践が要請されているのか、いかに組織を実践的に鍛え上げることである。

しかし、わが革命的共産主義運動の小ブルジョアの随伴者や、社会民主主義者（社青同解放派）が形を変え品を代えては前衛党建設

にし、真のレーニン主義を復活するために再建われわれは共産主義の本質的把握にたちもどる必要を感じる。この点が本章を設定した第一の理由である。

第二に、ブルジョア・イデオロギーから絶えず流布される「共産主義」自由の制限」という宣伝に対し、共産主義運動が必然的に提起する組織の問題を共産主義との関係において本質的にとらえ、共産主義的組織と自由の問題を説明することが必要と考えられる。

共産主義はすべてのいままでの生産関係ならびに交通関係の基礎を变革し、すべての自然成長的な前提をはじめて意識的にいままでの人間関係の創造物としてとりあつかい、それらの前提の自然成長をはきとって、結合した個人たちの力にそれらを服従させるのである。

分業によって人格的な諸力（諸関係）が物的な諸力に転化されているのをふたたび廃棄することは、それについての一般的な表象をわすれさせることによってではなく、ただ個人がこれら諸力をふたたび自分たちのものに包摂して分業を廃棄することによってのみである。（マルクス）

意識的に結合した個人たちの力にそれらを従わせるのである。ここにプロレタリアートの階級への形成（究極的にはプロレタリア独裁）の問題とプロレタリアートによる自由な意識的行為としての社会の組織化の問題が明確に提起されている。

このことは共同体がなければ可能ではない。他人との共同体においてはいじめて各個人は、かれの素質をあらゆる方面へ向って発展させる手段をもつ。したがってはいじめて人格的自由は可能になる。

に敵対している中で組織論の第一歩から論じておくことが必要に思われる。

組織論の問題はすでに述べたごとく、実践的結論をあいまいさを許さずつき出すので、特に重要な理論的課題であることを確認しておく必要がある。社青同（解放派）の社会的本質は組織論の中に明瞭に示される。全ての政治的潮流の性格は組織論の中に究極的に示されると言える。

政治的なものを、組織的なものから、機械的に切りはなすわけにはゆかない。

——レーニン——

〔一〕 共産主義と組織

革命的政党の組織に関する問題は、革命そのものの理論からのみ、これを有機的に展開することができ。

国際共産主義運動のスターリン主義的変質は各国共産党の官僚主義化をもたらし、世界革命の挫折を起因とした一国社会主義の反動的固定化は各国共産党の任務をソ連一国社会主義の防衛に從属せしめ、そのことによって各国共産党とプロレタリアートの自国支配階級打倒の任務は放棄された。その結果生まれたものこそ党物神崇拜（党員の主体性喪失とプロレタリアートの利益の党への從属）である。各国共産党の官僚主義的変質は前衛の魅力を喪失せしめ、組織への反発を一般化する傾向を創り出した。他方、このことが諸々の政治的グループの「反レーニン主義」の口実を与えている。共産主義運動の反労働者の歪曲に起因する党の官僚化の問題を「レーニン主義」に求めようとする転倒した思考、問題のとり違えを明らかに

現実的な共同体においては、個人たちはかれらの連合のうちに、そしてまた連合によって、同時にかれらの自由をも獲得する。（マルクス）

この点は説明を必要としないほど明瞭である。いままでの生産関係ならびに交通関係の基礎を变革し、それを自己の力に服従させるのだからである。ここでは共産主義運動が組織的結合を創り出す不可欠性が提起されているのである。

組織にしばられないことが自由であると考えている人が多い中でこのことの現実的意義はきわめて重要である。このような「自由」とは現実への盲目的服従以外の何ものでもないのである。

共産主義はプロレタリアートの組織的実践としてのみ現実的であるということは、現在のには物化された存在としてのプロレタリアート資本の法則に從属せしめられているプロレタリアートをたえず階級へと高めてゆくことである。そのようなものとして組織を受けとめないのは不自由な存在を自覚し得ない盲目的存在であり、そのような状態を「自由」と規定するのがブルジョア・イデオロギーである。

共産主義運動における組織的結合の不可欠性を明らかにしてきたが、それがいかなる結合であるかが問題となるであろう。

共同体のいままでの代用物、すなわち国家などにおいては、人格的自由はただ支配階級の諸関係のなかで発達した個人たちにとつてのみ存在していた。——かれらに対して独立したものととなっていた。（私人と公人の分裂）。そして同時にまた、それは他の階級に対する一つの階級の結合だったから、支配される階級にとつてはまったく幻想的な共同体だったばかりで

くまた一つの新しい性格でもあった。

一つの階級の個人がはいりこんだところの、そして第三者にたいするこれらの共同利害によって制約されていたところの共同関係は、いつでも、これら個人がただ平均的個人としてのみ所屬していたところの共同体であり、かれらがただ彼らの階級の生存条件の中に生きていたかぎりでのみ所屬したところの共同体だった。個人としてではなく、階級成員として。(マルクス)

従ってこれらの条件は、いままでは偶然にまかされ、個人に対して独立していたのである。なぜなら個人の分離と必然的な結合、すなわち分業によって強制されるよそよそしい結合だからである。

ブルジョア的な人格的自由と呼ばれるものはある一定の諸条件の内部でゆっくり偶然性をたのしめる権利でしかない。

この関係の粉碎こそが共産主義である。つまりエンゲルスが「必然の国から自由の国への飛躍」と呼んでいる移行を行なうのである。

これに反して革命的プロレタリアの共同体は、かれらおよびあらゆる社会成員の生存条件を自己の統制のもとに置くところの個人の結合にほかならない。

このような関係は自由の王国を現代的に創り出してゆくのが共産主義運動であると言える。共産主義運動が組織的実践としてのみ現実的であるということは、それが人間性の全面的解放をめざす、個人の自由な意識的実践であるというところである。

ここにおいて、組織問題が共産主義運動においては形式の問題では断じてないことが明らかとなる。スターリン主義の官僚主義の問題は、スターリン主義を共産主義運動の歪曲としてとらえることに

ちとるなどのことが必要だという確信をつくりあげうるだけで

あるのは各国の歴史の証明するところである。他方、社会主義の学説は、有産階級教育ある代表者であるインテリゲンツィアによって仕上げられた哲学・歴史学・経済学上の諸理論から成長してきたものである。近代の科学的な社会主義の創始者であるマルクスとエンゲルス自身も、その社会的地位からすれば、ブルジョア・インテリゲンツィアに属していた。ロシアでも、

それとまったく同様に、社会民主主義の理論的学説は、労働運動の自然発生的成長とはまったく独立に発生した。イレニーン

この厳然たる事実を認めないものは唯物論者ではない。社会同(解放派)のごとく「この社会主義的意識——いいかえれば労働者階級が本質として持っている本源的な認識能力を感性のうちにみる」などと百万倍よりかえしてもそれは観念論である。万人の見ている前で起っていることを「そんなことはあり得ない」と言っているのである。

物に支配されている社会から、人間の物を支配する社会への転化がすなわち共産主義であり「必然の国から、自由の国への飛躍」といふ質的飛躍があるのである。だからプロレタリアートの独裁を過渡として持たざるを得ないのであって、このような強制的変革を媒介としてのみ可能なことなのである。このことの過程的表現がプロレタリアートの階級への形成であって、それを現在に媒介するものが前衛党である。

それ故、プロレタリアートの意識的行為としての共産主義運動は、前衛党の組織的実践を媒介とするプロレタリア階級闘争の発展のうちに表現してゆくのである、と言えよう。そのようなものとして前

よってのみ明らかとなる。

(二) 前衛党とは何か

(一) 共産主義運動の意識性と前衛党

共産主義運動が組織の問題を本質的に提起していることを明らかにしてきたが、それは共産主義運動の意識性に根拠をもっているのである。同時に共産主義とはプロレタリアートの自己解放である。従って、前衛党組織論は、プロレタリアートの階級への形式と意識性という二つの契機をその内に統一しなければならぬ。

言うまでもないことであらうが、プロレタリアートの階級への形成とは究極的には共産主義への過渡としてのプロレタリア独裁である。社会同(解放派)はこれを否定しているところに根本的誤謬があることは、われわれの再三指摘してきたところである。

ところでプロレタリアートの階級への形成という問題設定それ自体がすでに意識性の問題であることは明らかであらう。問題はプロレタリアートがその存在から直接には自己を認識し得ないということにある。それは、精神労働と肉体労働の分裂を根本とする分業により、物化された関係にプロレタリアートがおかれていることによる。

われわれはいま、労働者は社会民主主義的意識をもっているはずだったと言った。この意識はたまた外部からだけもらしうものだったのである。労働者階級が、まったくの独力で、組合主義的意識、すなわち、組合に団結し、雇主と闘争をおこない、政府から労働者に必要なあれこれの法律の発布をか

前衛党はプロレタリア階級意識の独立した形態である。——しかも、革命のために独立した形態である。重要なことは、前衛党をこのよりな二重の弁証法的関係において、理論的に正しく把握することである。

共産党の組織上の独立は、いったい何のために必要であるか、という設問に対しルカチは述べている。

それはまずプロレタリアートに、自分自身の階級意識を歴史的形態として、直接に認識させるためである。次にそれは、日常生活上のあらゆるできごとに関して、階級主体の利益の要求する態度をはっきり、かつすべての労働者に分らせるためである。最後にそれは、階級としての独自の存在を、全階級に意識させるためである。

そのような性格を持つ前衛党とはプロレタリアートの階級意識の最高の形態でなくてはならない。そしてその任務はプロレタリアートの前衛として、プロレタリアートの一部であり、プロレタリアートの階級意識を喚醒せしめ、プロレタリア階級闘争を断乎として推進するところである。

かかる意味において、前衛とは共産主義運動の実体的基礎であり、その政治的結合が前衛党である。(黒田久組織論序説)

このような関係からして、理論的にも実践的にも前衛党がプロレタリアートを代理して行動するわけではないことは疑問の余地のないことである。

(二) 前衛党と大衆

前衛党と大衆との関係は前衛党の規定の中に有機的に展開されて

きたし、またそのようなものとしてのみ解明し得る問題である。ところで、社青同（解放派）がこの点をまったく理解せず、混乱した批判をしてきているので、社会民主主義の党と前衛党の違いを明解にしておこう。

●革命（社青同解放派機関紙）五号の高村論文で次のごとく述べられている。「党と前衛が直接的にイコールとして、いいえれば前衛党として論じられることによって、前衛はあくまでそれ自身としては、具体的現実としては労働者階級の影でしかなく、直接的に労働者階級の代役を務めることはできないという原則が捨て去られていくことである。」

彼らは常にマルクスの引用を行ない「共產主義者は実践的には現実の運動の断固とした部分でしかない」ということの真の意味を理解せず、「共産党宣言」のこの引用文の同一のセンテンスの後半についてはずっとふれない。

われわれが、前衛と前衛党を直接にイコールとしていないことは明らかであるが、ここで言っていることは、社青同にとっては党と大衆がイコールなので、われわれに対する批判としてはより大きな誤解にもとづくものであると言えよう。われわれは前衛党を大衆と区別し、独立したものとして創ることを主張しているのである。

又、われわれは、前衛党が労働者階級の代役を務めるとは言っていないのであって、労働者階級の現実の闘いの断乎とした推進部分であり、その一部であると共に、労働者階級の階級への形成の媒介であると主張しているのである。

ところで問題のカギはやはり、労働者階級の影でしかない前衛の意味について厳密に規定すること、又その影と労働者階級との現実

うった立場から統まらないならば、革命の勝利のために必死になって研究する姿勢で読まないならば、何の意味も生まれてこないであろう。そのような人達は、あまり理論的な問題でないと行って読み流してしまふであらう。しかし、支配階級との死活的闘いにすでに突入した日本階級闘争の現実を明確に認識し、不退転の決意をもって闘い抜こうとする、実践的姿勢をもつ読者にとっては巨大な意義を持つものであると言える。

重要なことは、ボリシエヴィキ党の組織的原則とは日常的闘争の中で自己にとっても、組織にとっても闘いとするものであるということである。「これらの条件は、一挙に発生するわけにもゆかない。それらは、長いあいだの労苦によって、苦しい経験によってはじめてつくりあげられるのである。」

第一に、革命党の中央集権とは何かについて明確にしておく必要がある。ツァーリの王政下で革命党の建設を行ってきたレーニン

は一九〇二年の「何をなすべきか」の中で明瞭に解答を与えている。「秘密活動のいっさいの糸をその手に集中する、このような強力な、嚴格に秘匿された組織、必然的に中央集権的ならざるをえない組織は、あまりにもたやすくはまった攻撃にとびだすおそれがあり、政治的不満が増大し、労働者階級その他のなかの激動や憤激がつよまって、そうすることができるようになつた必要にならないうちに、軽率に運動を激化させてしまふおそれがある。」という疑いに対して応えて言う。「どんな戦闘でも敗北の抽象的の可能性をふくんでおり、戦闘を組織的に準備する以外にこの可能性を減少させる手段はない。しかし、問題を現代ロシアの諸条件の具体的な差盤において考えるなら、まさに運動に臨固さを与え、軽率な攻撃をや

る關係について明らかにすることであらう。だが、それは永遠になされないであらう。

その理由は、彼らが党に大衆としているところにある。すなわち彼らは意識性、あるいは意識の持つ現実的意義を認めないところに根本的問題があるのであって、「ただ現実の、血と肉をもち感性的に活動しているプロレタリア運動の総体だけが、ただ現実のプロレタリア党の総体だけが——どんなに社民の、スターリン主義的外皮をもつていようと——現実の力をもち生命をもっている現実的存在である。」ということから一歩も抜け出せないのである。

「現実を認めよ」というのが社青同（解放派）の主張の結論であるが、まさに現実とはブルジョア社会である。

意識を完全に否定する彼らは、考えたり、文書を書いたりすることの意味をどう説明するのか聞きたいものである。しかも、彼らは何故、社青同（解放派）を創ったり、反帝学評を創ったりするのであるのか。

彼らの実践的結論は、社民内分派以外に組織を認めないということであって、全ての理論的努力はその合理化にのみあるのである。

(三) ロシア革命の教訓とボリシエヴィキ党

冒頭に引用したごとく、ロシア革命の勝利の教訓としてレーニンは一九二〇年に執筆した「左翼小児病」において明らかにした「革命党の中央集権」と「嚴格な規律」の持つ意義をわれわれは真実に学ばねばならない。何よりも、この書が何のためにかかれたものであるかを徹底的に確認しなくてはならない。革命のために身を投げ

る可能性から運動を予防するためこそ、強固な革命的組織が絶対に必要だという、明確な結論をくださざるをえないであらう。このような組織がなく、しかも革命運動が急速に自然発生的に成長しつつある今日においてこそ相反する両極端がすでに認められる。「ただしっかりと社会民主主義的政治を行ない、いわばあらゆる革命の本能と志向とを満足させる中央集権化された戦闘組織だけが、運動を軽率な攻撃から予防し、勝算ある攻撃を準備することができるのである。」

ここで言われていることは重大である。無条件の中央集権制に真正銘の「寡頭支配」が主張されている。「形態上からいえば、專制国のばあいには、このような強固な革命的組織は「陰謀的」組織とも呼べる。このような組織には秘密性が最大限に必要だからである」とレーニンも主張しているように專制国ロシアにおいて不可避であった組織の性格があらゆる国に創られるべき革命組織の原則として打ち立てられ得るかの問題である。又、中央集権制がスターリン主義の官僚主義の原因であるとする意見もあるのだから一層重要な問題である。

形式上、全ての人の戦術の決定への参加を認めたとしても問題が解決しないことは明らかである。だから組織問題は、革命的發展に関する最も深い、かつ最も思想的な問題であるといわれるゆえんである。中央集権制のこのような提起の中に、革命党が最も高度の政治的判断のもとに正しい戦術を一致して実現し得る組織に鍛え上げられることなくして、革命に勝利し得ないという問題が含まれているのである。ドイツ革命運動の悲劇は、ロシアに比べてあまりに大きな政治的自由が与えられていたために、このようなロシア革命の

組織建設上の教訓が理解し得なかつたことに大きな根拠を持っていると言える。

更に、中央集権制に対する「民主主義」の形式的要求に対して、レーニンは次のごとく答えている。

われわれの運動の活動家にとっての唯一の真剣な組織原則は、つぎのものでなければならぬ。いわく、——もともと厳格な秘密活動、もともと厳格な成員の選択、職業革命家の訓練。これらの特質がそなわっているなら、「民主主義」以上のものが、すなわち革命家たちのあいだの完全な同志的信頼が、保障されるのである。そして、このより以上のあるものこそ、われわれにとって絶対に必要なものだ。なぜなら、わがロシアでこれを民主的な全般的統制で代用させることはまったく問題にならないからである。そして、真に「民主的な」統制が不可能なら、革命的組織の成員はなんの統制もうけないと考えたなら、大きなまちがいであろう。彼らは、民主主義の遊びごとふうの形式を考えるひまこそないが、自己の責任をはなれたいききと感ぜたり、そのうえ、経験によって、真の革命家の組織は不適当な成員をとりぞくためにどんな手段をも辞さないであらうということを知っている。

このようなものとして組織が創られるならば、「民主主義」の否定などというのは笑うべきことであらう。

更に重要なことは、党の組織上の集中化（これから発生して、これのより一つの面を形成する、あらゆる規律の問題をともしるところの）と戦術上の決断力とは、相互に必要としあう概念である、ということである。一方で党の実行しようとする戦術が、大衆の中で

重要な思想的問題の一つでもある。なぜならこの規律はもともと革命的階級のうちに最も強い意識をもつ、前衛的意識の自由な行為としてのみ成立しうるものだからである。その規律は、みずからの思想的前提なくしては実現されえないものである。黒田氏の組織論序説において「前衛的組織問題は、それゆゑに、共産主義の人間の確立を第一の前提条件とするのである」と指摘されている点である。

レーニンが「左翼小児病」において、「プロレタリアートの革命党の規律はなにによってたもたれるのか？それはなにによって点検されたのか？なにによってうらめられるのか？」と自ら問うて、「それは第一に、プロレタリア前衛の意識、革命にたいする献身、その忍耐、自己犠牲、英雄主義によってである。」という点をあげているのはかような重要な意味を持っているのである。だから規律が厳しすぎるとか、活動がきつすぎるとかという主張は主体性のない者が言うことであると断言してもかまわない。このことは革命運動に真に主体的に参加しているものにとっては本能的にも認識されている点である。そして、労働者階級にとっては非常にたやすく階級の本能によってつかみとられるものである。学生戦線における同盟建設においては、インテリゲンチヤが理論的にはかりでなく精神的にも肉体的にも共産主義者として自己変革してゆく過程でこの点は特に重要な意味をもっている。

次にレーニンがあげている第二、第三の点をみておこう。

第二に、彼がきわめて広範な勤労者の大衆、まず第一にプロレタリアの勤労大衆と、だが、また非プロレタリアの勤労大衆ともむすびつき、彼らに接近し、必要とあらばある程度まで彼

能力を発揮しうるためには、それはまず、党の内部で能力を発揮することが必要である。このことは全ての力の再編成としての闘争方針のあらゆる変更や、能率のあらゆる変化が、個々の黨員にまで作用するような機構として革命組織を創ることを意味する。このような組織の創る感受性こそ、健全な自己批判、しかも行動力を増す自己批判の可能性を最も進めてゆくものである。

この点に他の一切の組織と革命的組織の根本的差異がある。規律を抜きにして組織が語れないのは明らかであるが、組織的規律と自由。あるいは組織と主体性の問題について、革命的組織はいかに応えるかの問題である。組織的規律からの自由は主体性がさるのではなく、まったく逆の性格を持っているところに革命的組織の特徴があるとと言える。

今日のブルジョア社会における個人的自由は、非違的に他人の不自由を踏台にしているがゆゑに、すでに墮落した、しかも人を墮落させる特権たりうるのみである。

これに対して、あらゆる革命的組織が本質的に、あらゆるブルジョア政党や、日和見主義的労働者政党より高度の組織類型をもっていているということは、革命的組織が、そのひとりひとりの成員にたいして課するより高度な義務にあらわれている。第一軍で明らかにしてきた「必然の国から、自由の国への飛躍」という共産主義の本質によるものである。

規律の問題は、一方では、党にとって第一に実践的な問題であるとともに、党の実践活動にとって欠くべからざる前提条件をなすものである。他方でそれは、革命的發展に関するたんなる技術的・実践的問題であるのみならず、革命的發展に関する最も高度な、最も

らととけあふ能力によってである。

第三に、これらの前衛がおこなう政治的指導のただしさによって、彼らの政治的戦略と戦術のただしさによってである——ただし、これはもともと広い大衆が自分の経験にもとづいて指導のただしさを納得するという条件のもとである。

しかも「これらの諸条件（の全て）がないと、実際に、ブルジョアジーをたおし、全社会を改造しなければならぬ先進的階級の党にふさわしい革命党の規律は、実現できないのである。」

この三つの条件を満たすために全ての黨員が真に主体的に、いきいきと努力することによってはじめて革命党の規律は「たもたれ」「点検され」「うちかためられる」のである。

このことの中に党が、大衆の自ら実現する革命のための党であることが、みごとに示されていると言える。レーニン主義が代理主義であるという批判ほど、愚かなものはない。革命のために不可欠な、しかも革命のための一貫した党としてレーニン主義を理解しないのが「左翼」共産主義者である。彼らは、大衆から自分を区別し、手を切ることに必死で、大衆を組織し得ず、全大衆をブルジョア・イデオロギーの意のままに放置するのである。

レーニンは「共産主義者の任務のすべては——あくれた人々を説得し、彼らのあいだで活動することができることであって、頭のないなかで考えだした、子供じみた「左翼的な」スローガンで、彼らと自分たちのあいだに垣をつくることではない」と言っている。この点は特に重要である。われわれがいまだ充分に大衆をかくとくしきれていないのは、このような意識性の欠如にもとづくのである。そして、社会民主主義者は、共産主義者の意識の欠如を認めな

いことによつて、大衆を自然発生性にまかせ、ブルジョア・イデオロギーの意のままにまかせるのである。社青同（解放派）の人達は「大衆の自立」を説教してまわり、それが何の効果も生まないことにききせをかい、自らの無能さを証明しているのである。直固する課題に應えるためには、われわれはレーニンの戦術をみがき上げ、自ら政治的に熟達しなければならぬ。

（四）革命的左翼の戦術

今年、われわれは杉並選挙——みのべ選挙闘争を闘い抜き、砂川基地拡張反対闘争を勝利的に闘い抜き、都議会闘争を経て、八月の広島反戦集会の圧倒的成功を納めた。更に、今秋の法大闘争の巨大な爆発を皮切りに一〇・八羽田闘争の激烈な展開と一〇・一七国民葬の圧倒的成功、そして一〇・二〇国労スト支援と一〇・二一学生ストライキ闘争の実現、そして再度の一・一二羽田闘争の実現をなしとげた。

これらの闘争戦術について、「左・右のジグザグ」などというまとはずれた批判や、好意的忠告に至るまで、さまざまな評価が聞かされるので、その一つ一つの疑問に答え、七〇年に至る革命的左翼の戦術を明確にしておくことが必要に思われる。ところでここにおいては、これらの戦術に基本的に貫かれていた考え方は何か、それはいかなる現実認識にもとづいていたものなのか、そして、又、克服すべき問題は何かについて、その視点を明らかにすることにはほとどめざるを得ない。

第一に確認すべきことは、日本帝国主義の危機は、その深さと、

の経験を通じて理解している政治への参加の方法においてということである。

このことを理解しないときには、大衆を獲得するどんな正しい戦術もあり得ないのである。

まずまず拡大する革命的左翼の任務の領域をそもそも否定してかかるようにする批判に対しては、われわれは答える必要を感じない。たとえば杉並選挙に対する住民ベッター主義だの、砂川闘争における農民ベッター主義といったたぐいの批判に対しては、われわれは地域住民や、農民の獲得を自己の任務にしているのだと答へれば充分である。つけ加えるならば、七月都議会闘争において、われわれが闘争を行なうということについて前もって知らせなかったから自分たちがたまた遅れたといつて批判したブンドの指導者については何を言わんやである。三月以来、あれほど美濃部批判を叫んでいた人達が美濃部都政下における九〇〇〇名を超える労働者の首切りという大問題を知らなかったとは信じられぬし、闘いの必要を認識するか否かは諸君の自由である。

（一）杉並選挙——美濃部選挙の教訓

杉並選挙闘争を全同盟の総力をあげて闘い抜くことによって、われわれは広範な地域住民と結びつくことに成功し、スターリニストの拠点杉並において大きくその基盤を切りくずすことに成功した。この闘いの中から教訓とすべき第一の点は、従来、革命的左翼の中に強く存在した誤った考え、すなわち選挙を党の政策の一般の宣伝の場としてしか理解しない一人よがりの誤着した考えを克服し、地域住民のかかえている課題に正面から取り組むことによって始めて

広さにおいて、かつてないほどの矛盾を人民各層の中に蓄積しており、労働者階級の反逆の契機が増大とともに地域人民の反抗、農民の反抗として、顕在化しつつあり、全人民の反政府の意識は小さな火花によつてもタンジン爆発を起し得る状態に近づいているという認識である。そのことは革命的左翼の闘いの領域が、かつてないほどに広がっていることを示すものである。

第二に、支配階級が自らの支配の危機を感じており、それ故、強暴な攻撃に振じてきていることである。佐藤政府の攻撃の激しさを日本帝国主義の危機の現われとして把握することが決定的に重要である。この認識は、このような情勢に應じた厳しい闘いの方向を基本的に要請するのである。このような認識を、われわれは六三年秋の激化の中からつかみ取り、その確信をその後の推移の中から得てきた。

第三に、右の二点から大衆の意識の動向をみるならば、政治的流動化と、かつてない政治意識の高揚をみることが出来る。「大衆社会化状況と、マイホーム主義がまんえんする中で、羽田闘争などは異和感しか生まない」といった評価を断乎われわれは排する。このような情勢のもとで大衆を固定的にとらえるのはナンセンスである。レーニンが「大衆の概念は、まさに革命闘争の経過中に変化するのである」と言っている問題をはっきり確認する必要がある。

このことは、大衆がどんな左翼的な戦術にでもついてくる条件が増しているということではない。——この点が重要なのだが——そうではなくて、ある一程の条件のもとでは、きわめて広範な大衆が政治に参加し、急速に政治的に眼覚める条件が増大しているということである。ある一程の条件のもとでは——とは、今まで大衆が自ら

成功を納めることができたのだという点である。この点こそ危機にたつ帝国主義の矛盾が、あらゆる層にわたって広く、深くおしよせていることを示したのであり、日共ハスターリニストや社会党がこの課題にまったく応えることができずに敗退して行ったのである。ブンドの「住民ベッター主義」という批判は、彼らの貧困証明書以外になにもでもない。

第二の教訓は、日本帝国主義の政治的攻撃のパクロをいかなる方法で行なうのかという点である。言うまでもなく、われわれは支配階級の攻撃を可能なかぎり全面的に明らかにしてきた。ところで可能なかぎりとは多くの人達に理解し得る方法で有効に行なうということである。宣伝・煽動は聴衆に理解されるかぎりにおいてのみ意味を持つことは明白である。このことは言っている内容の低度を下げることや何を何ら意味しないばかりか、その逆であり、われわれの主張を広範な大衆に理解させるためには一層高い思想水準と政治的熟達を必要とするということである。

美濃部選挙を前にして、革命的左翼はいかなる試練にたたされたのか。

巷にあふれる自民党都政批判の声をいかに結集するのか。この点を機軸として創り出されている政治的流動化をいかに反政府の一点に集中して現実の力として登場せしめるのかであった。

そもそも、この政治的流動化にいかに入介入するのかを真剣に考え抜かなかつたものは左翼の名に値しない。

都知事選の候補がどう決定されるか——統一候補が決定されるか否か——統一戦線が成立するか否かをめぐって創り出された流動化と、その中で指導的政党の一手一投足を見守っていた大衆はまさ

に「自民党政府に一矢むくいたかった」のである。この力を大衆的に結集し、一つにし、その全エネルギーをもって支配階級への一大反撃の第一歩を創り出すことこそ共産主義者の任務となっていた。そのことに成功するならば敗北に敗北を重ねていた階級闘争の一大転換を実現することが可能な状況にあったのである。

この時に、革命的左翼を自認する多くの人達が「いかに自己を社・共と区別するか」ということに意識のほとんどをうばわれているという実に馬鹿げた状況が存在したのである。社共の区別など自分達にとってはもうとくに終っているべきであらう。その上で、問題は社・共とどう違うかなどということではなく、又理解もしない大衆をどう動かすかであったのである。しかも、われわれの存在についての認識もそのような政治的経験を通じてしか絶対的大衆は理解しないであらう。まだまったく政治的に無自覚な大衆を實踐を通じて教育するのが共産主義者の任務である。統一戦線を組んだら自分の立場がなくなるといふ不安に襲われるといった低水準な状態に日本の革命的左翼の多くの人達がおかれていた、ということも認識して、それを克服してゆくのが緊急の課題である。

社青同（解放派）は理由を若干異にしている。彼らは社会党の分身としての本来の任務からして社会党の選挙運動に走りまわり、美濃部にも無条件の支持を寄せている自己を隠蔽するために、全学連の中でこの論争では美濃部批判（それでもいいかげんなものだが）を大声で叫ぶ必要があったのである。

そして戦旗の各号を眺めれば明らかであるが、ブンドには何の原則もなく、美濃部連の日本階級闘争における意識を考える能力さえなく、結果を見てびっくりするのがおちである。

で実現し得ないことが明らかであり、革命的左翼にとって決定的な意識をもっている。そしてスターリニストとの闘いにおいては、杉並での勝利におとらぬ重大な意味をもっている。この新しい領域での勝利はスターリニストの死命を決する質的転換を意味するのである。「三里塚に全学連や反戦青年委員会が来ることは共産党に死ね」ということである」ということを日共の人が戸村委員長に語ったと言いがそれほど大きな問題となるのである。かりそめにも農民ベッタリ主義などという批判はすべきではないしそれは自らがいかにあさはかであることを証明するのみである。

更に、砂川・三里塚・福島・沼田と続発する農民の闘いは日本帝國主義の危機の深さを示すと共に、主権主義によってけっして解決し得ない農業問題の解決の道をプロレタリア革命の問題として提起するのである。

砂川・三里塚農民との連帯行動の中から農民の信頼を勝ちとり、農民をも指導し得る革命家として自らを鍛えてゆかねばならないのである。

ここでもわれわれは「左翼的」一人よがりを現にいましめ、ねばり強く努力することによって成功を納めてきたのである。共産党のいくどいセクト主義から守り、共産党から訣別してわが革命的左翼の側に基本的にかくとしてきたのである。政治的経験にも非常にとぼしい農民が短期間でこのような立場に移行するのはきわめて巨大なことである。

第二に、砂川闘争の過程で一層明確にしてきた、社会民主主義者との統一戦線について述べておく必要があろう。

われわれは、七〇年に至る一連の政治的階級闘争を社会民主主義者

最後に、杉並において北小路、長谷川が無所属で立候補したことについての馬鹿げた批判に当たっておこう。一体諸君たちは各自自治会で役員選挙に立候補する際に「共産主義者同盟」などの肩書をつけて立候補するであらうか。われわれの運動の現時点においては、革共同で立とうが革新系無所属で立とうが、ほとんどの大衆にとって社会党や共産党とは違うらしいくらいの認識しか持たれておらず、それくらいの認識でも持つ者は少ないと考えているからである。このような状態が良いとは考えていないが革共同を名づけたからこの認識が変わるわけではない。多少とも知りたいたいと思う人が居たならば経歴を説くだろうし、更に知りたければそのような人達の前にはたまたま資料が山と積まれるであらう。知る意志のない人に知らせることは馬に水を飲ませるのと同様に不可能である。

更につけ加えるならば革共同と共産同の違いなどというものは活動家にしてもほとんど理解していないのである。だから共産同につき従っている活動家も不幸にしてまだ居るのである。

（二）砂川闘争の教訓

砂川闘争がベトナム反戦闘争の新しい段階を切り拓いたことの意義については言うまでもないことである。同時に砂川闘争は革命的左翼の新しい実践的領域を大胆に切り拓いたことに第一の要点があると考える。それはプロレタリアートと農民との統一戦線の第一歩を革命的左翼が始めて切り拓いたことの持つ意義である。

現在において、三里塚芝山の農民との結合を創り出し、福島

農民との共闘は今新たに実現されつつある。

このことは日本革命を本気で考えるならば農民のかくともなくしとの統一戦線のもとに闘い抜こうと考えている。しかも、現在の力関係のもとではヘゲモニーの大半を社会民主主義者が握ることを承認した上でそうしようと考えている。

第一の理由は、日本の労働者階級の大半が社会民主主義者の指導に服しているという現実をはっきりと見るからである。

第二の理由は、支配階級の攻撃に対して労働者、人民を動員する作業において一定のところまで社会民主主義者と共同して行なう可能性を認めるからである。

第三の理由は、われわれは労働者階級を社会民主主義者の影響力からときはなち、われわれの側に結集させたいと望んでおり、それは共同の闘いを通じてしか、すなわち実践を通じてしかけっしてなし得ないからである。

このような考えは、砂川闘争においては、二・二六―五・二八―七・九と発展していった砂川闘争に一貫して貫かれていた基本的な志向であった。現実には社会党をもまき込んだ統一行動として実現されたのは七・九であるということを考えれば一見パラドキシカルな主張のように見えるが、まさに五・二八の圧倒的成功が社会民主主義者に自信を与え、七・九を実現せしめたのだということを見なくてはならない。

共産党との関係においても同じようなことは言える。大衆は自らの経験を通じてしかスターリニストとの訣別をなし得ない。そして社会民主主義者の中の左翼的傾向が従来政治的には社・共統一行動主義者として表現されていたということは決定的な意味を持っていて。

しかし、決定的に違う点はスターリニストは意識的存在であり、

日共の転換路線は絶対に六〇年をくり返してはならないという方向に向いていることを明確に握んで問題をたてる以上、統一行動は不可能——どんな形態にせよ——ということである。このことをまったくつかみ得なかつたブンドが五・二八で完全に破産したことはすでに幾度も明らかにされてきたことである。われわれの認識の正しさを一点のくもりもなく証明したのが一一・九闘争であった。

われわれの提起する社民との統一戦線に対し「左翼的」批判を投げかけるブンドの人達は何と一貫性のない、矛盾にみちた行動をとっていることか。口先では「批判」し、行動ではいつも追従しているではないか。総評の統一行動に参加することは社民との統一戦線を認めることではないのか。総評の指導部が社会民主主義者であることを知らない人が居るとは思えない。又、反戦青年委員会は社会民主主義者——それもけつして左翼的とは言えない社会党構改派——との統一戦線であり、しかも事務局は完全に社会民主主義の一角でぬりつぶされている。

こんなことはもう説明を要しない。あたりまえのことである。問題は、これをもっと意識的に、主尾一貫したものにするのであり、そのためにもっと政治的に熟達することである。一貫性のない、子供じみた反発に問題があるのだ。全学連という決定的な部隊を引きこめる学生共産主義者は、もっともと自己の政治的任務に目覚めるべきである。たとえば、総評統一行動に参加した際、学生の一人よがりのヤジがどれほど自己の成果をむだにしているかを考えるべきであろう。一〇・六の日比谷野首の集会で沖繩代表のあいさつに野次をとばした学生は、もう救いようのないほどナンセンスである。勇敢なる全学連の闘士はもっともと、労働者階級の真の獲得と

同時に、美濃部政を結局自民党と同じではないかというふうに清算することにわれわれは断乎として反対する。そのような清算主義によつては、わずか二〇三〇名の労働者、学生の方で都議会を揺り動かした現実を説明し得ない。しかも現実が存在していた勝利の可能性を見落してはならない。われわれはこの過程から、社民内閣と労働者階級の闘いの方法をも理論的に解明してゆかねばならぬ。

われわれは、ドイツ共産党の「社会ファシズム論」とフランスの「人民戦線戦術」の敗北の教訓を学び、正しい統一戦線を身につけねばならないのである。

四一〇・八羽田と激動の五週間

一〇・八羽田闘争以降の激動の五週間は、きわめて多くの教訓をわれわれに与えている。共産主義者同盟の機関誌「戦旗」はいみじくも、正しく主張している。曰く「一〇・八を正しくとらえた者のみがその後の階級的激動に應じ得たのだ」と。まさにその通りである。一〇・八闘争を支えた立場こそ、その後の激動の五週間に堪えぬき、闘いを前進せしめたのである。

一〇・八闘争の戦術を決定した考えは次の二点に集約され得る。第一に、佐藤の訪ベトナム日本の参戦国化は日本人民の利益にまっこうから敵対していること、それ故、この攻撃に対してその重大性を明らかにし痛烈な打撃を加えられねばならないという認識である。そのためには権力の弾圧体制をはねのけた闘いが必要なこと、それは勝利を現実目標とした闘いでなければならぬことである。

第二に、このような戦術が人民大衆に支持されることである。す

いう共産主義者の任務を自覚し、主尾一貫した闘いを行なうべきではないだろうか。このような一人よがりな、労働者階級をますます社会民主主義者の影響下に追いやっていくのである。

四一〇・八羽田と激動の五週間

二十日間にわたる東交合理化反対、水道料金値上げ反対の七月都議会闘争はわが同盟の闘いによって誰が労働者・人民の立場にたつていのかを全社会の前に明らかにした。そして同時に美濃部選挙をめぐる革命的左翼内部の対立を一点のくもりもなく示したのである。社会党、共産党、公明党、民社党が一致して東交を労働者におしつけようとする、驚くべき反動的攻撃がかけられてきたときに、誰がそれを粉砕する闘いを断乎として推進したのか、このことの中に革命的左翼を名乗る全潮流の真実の姿がうきほりになった。

社青同（解放派）は社会党の一翼のもとになんとか闘いを中途でおしどめようとやっきになり、わが同盟を中心とする戦闘的労働者と学生に一揆主義なる批判をなげかけ、はたまた「都議会に乱入したために東交労働者の中での闘いが不利になっている」などというデマまでとばしたのである（そうではなくて解放派の指導部の社民内での地位があらゆることではないか）。又、美濃部批判をがなりたてていたブンドはわれわれの闘いを新聞で見るまで姿さえ見せなかつたのである。

美濃部の当選によって切り拡かれた階級闘争の有利な局面は、都政を実現する労働者階級の現実の闘い以外の何ものでもないことをわれわれは指摘してきたのであり、その真の意味が問われたのである。

なわち、日本参戦国化という攻撃の決定的転換を認識する条件が広範に存在しているというものであり、同時にわれわれの闘いがきわめて正当な防衛的な、最低限の抵抗権の表現にすぎないということを理解せしめる条件である。

このわれわれの認識と戦術の正しかったことは、全世界の人民、全日本の人民の中から日増しに高まっていた全学連支持の声に現われている。しかも、支配者階級による恐るべきフレームアップと反動的キャンペーンの洪水の中で労働者・人民の支持は拡大して行ったのである。

その成果は、国内においては第一に一〇・一七国民葬の圧倒的成功が戒厳令弾圧下で一方を超える大衆的結集のもとにちとられたこと。第二に、国労の軍事物資輸送拒否闘争へと巨大に発展したと。第三に、一〇・二一ストライキが非常に短期間の準備にもかかわらず成功にかちとられたこと。第四に、再度の羽田闘争への高潮化した前進をくり出したこと（安保は再度の国会突入を実現し得なかった）に示されている。

ところでこれらの闘いの中で交された戦術上の論争に明確に答えなくてはならない。

第一の山崎君暗殺抗議国民葬の性格をめぐる論争である。基本的対立（人民葬か国民葬か）は、これを羽田闘争をすでに全面的にすなわち闘いの必要性ばかりではなくその戦術に至るまで——理解し、支持している人々のみ結果の場とするのか、それとも圧倒的多数の未だ多くの点で疑問を持ち、政治的に無自覚な人達をかくとくする場として設定するかであった。ここで示された「左翼小児病患者」の不安というものはもう救いようのないものであった。遅れた

大衆の獲得など彼らには思いも及ばないことであったのだ。自分達の中でまだ羽田闘争の意義や、正しさがつかまれているから、内輪の集会でそれをやらなければならないという主張であったのだ。「人民群」にすべきであるという主張を左翼的だと信じ込んで主張していた人達は、残念ながら前衛の立場からではなく、後衛の立場から「一〇・八闘争は正しかった」と叫ぶ場所を欲していたのである。ただそれだけである。

労働者階級を中心とした全国民大衆の獲得を自らの任務として設定したわれわれの立場の貫徹として一〇・一七国民群は圧倒的に成功し、一〇・八以後の弾圧に対して巨大な反響の第一歩を切り拓くことに成功したのである。それは、このような立場を徹底的に貫いたものとして一〇・八闘争をわれわれが位置づけたいからこそ可能だったのである。

第二、第三の点に関しては、ブンドが二〇国労の闘いにまったく対応し得なかったこと。そして二一国際反戦ストにおいてはブンドも杜青同もきわめて有利な政治状況のもとにおいて一つとしてストライキを実現し得なかったことの中に、いかに階級情勢の流動化を見抜く能力もそれを指導する視点も持ち合わせなかったかを指摘することにとどめておく。

第四に、佐藤訪米の再度の羽田闘争において、われわれがきわめて注意深く戦術を決定して行ったことを批判する人達に伝えておこう。一・一二羽田闘争の戦術は刻々と変化する階級情勢の変化の状況の中から導き出されなければならないことは当然すぎるほど当然である。戦術は、そこに結集した学生の自己満足のために決定されるものではない。全階級の力関係の変化の厳密な測定のもとにのみ、すなわ

か、いや彼らは、それを武装蜂起の芽だと信じ、強くほこりに思っているらしいからけっしてそうはならないであろう。

一〇・八闘争の精神は一言でいって、全大衆のかくどくである。その闘いはまだ始められたばかりである。七〇年にはもういくばくの時間が残されているのか。一〇・八によって真に開始された、七〇年への闘いに勝利するために大衆の中に！それは何よりも思想

ち階級の前進と全人民の獲得の最も有効な方法としてのみ正しい戦術は決定されるのである。ブンドや杜青同（解放派）の批判は、自己の頭脳の貧困証明書である。彼らにはこのことを考える姿勢も、能力も欠けていたのである。

だから彼らには「断乎たる闘いを」という主張を襲まねのごとく叫ぶことはできても、いかなる具体的戦術が、いかなる理由によって正当であり有効であるのかはまったく明らかにはし得ないのである。それ故、盲目的運動でしかない。そのみごとな破壊ぶりは、中央大学から東大への移動が緊急避難——これは東大駒場総代会に提出され可決された決議文の表現であり杜青同（解放派）の執筆になるものである——であるというところに第一に現われた。緊急事態とは、いついかなる時点における認識と比べて予測し得なかった新しい事態を意味しているのか。更に、東大駒場では、本館にバリケードを築きとじ込められたのは誰であったか。本館の中に逃げ込むために東大に行ったのか。そして最後に、一・一二闘争を武装デモだとか、武装蜂起の萌芽だとか言っているが、ヘルメットや角材はダテに持つべきではないことをはっきり忠告しておこう。われわれは一・一二闘争を断乎として一〇・八の再現として闘うことの完全な正当性に関する独自の判断をもって闘い抜いた。その判断の基準は、一〇・八以後の弾圧と反動的キャンペーンをはねのけた労働者階級の闘いの前進と、決定的なのは由比忠之進さんの死の抗議による階級的力関係の一変と、沖縄県民の闘いの爆発にある。

ところで、われわれより早く一・一二の戦術を決定していたと主張するブンドや杜青同（解放派）の人達のあまりにたよりない姿勢についていささか期待はずれの感をいだくのは失礼になるだろう

の強さによって支えられる。われわれの主張を知りたがっている大衆へ、更に未だ無自覚な悪口雑言をあげせかけてくる大衆の中で闘い抜かねばならぬ。

厳しい訓練の渦中に突入した革命的共産主義運動に身を投ぜんと欲する先進的学友は、わがマルクス主義学生同盟（中核派）に結集せよ。（中核60号より転載）

日本共産党第十一回大会決議案を批判する

レーニン組織論からの快別

細胞の「支部」への変更

すでにふれてきたような、七〇年代における日本共産党の反革命的対応の「理論的再武装」を組織的に貫徹するために、第十一回大会にむけて彼らは、レーニン組織論からの決別を意味する党規約改正案を準備して発表した。

その象徴的問題は、いうまでもなく細胞を支部に公然と名称変更した点である。

すでに第十回大会で、細胞を対外的に表現する場合には支部の名

称を使ってもかまわないと変更を加えていた。そのため、この三年間、居住細胞の掲示板などは殆んど〇〇支部の名称が使われていた。

今回の措置は、このような過去の経験にたいして規約的承認を与えるものであるといえるが、しかし、党組織論の上でそのもつ意味はきわめて重大である。なぜなら、細胞が支部かは、決して党組織の単なる名称の問題に過ぎずとはならないからである。党規約第一條の党員の資格問題をめぐって、ロシア社会民主労働党の第二回大会がその討議のほとんどを費し、メンシェビキとの分裂をかけてまで党規約を防衛したボルシェビキの闘争が、後に十月革命の勝利につながっていったように、党規約をめぐる論争は、往々にして組織論上の核心にかかわる問題を提起しているのである。

共産主義者の党は、いうまでもなく、労働者階級自己解放のため

の手段である。そして、労働者階級の前進としての党の機能を果たすことができるためには、労働者階級の内部に党組織の実体的基礎を構築せねばならないと同時に、党組織自身共産主義者の自覚的結束体として労働者階級から相対的に独立していなければならない。その上、革命を勝利させるための党の組織原則は、レーニンが『左翼小児病』のなかでロシア革命勝利の普遍的教訓として定式化したように、中央集権の原則である。最近、スターリン主義の伝統的權威の崩壊のなかから、ノンセクト・ラジカルを革命的左翼に代置しようとする傾向の人間が、このレーニン組織論の核心的な問題を無視・抹殺し、解党主義の流れをつくりだしていることについては、別の機会に論ずることにするが、しかし、労働者階級自己解放の手段としての党組織の建設の問題を考える場合、右の点をまず前提的におさえておかねばならない。

なぜなら共産党が細胞を支部と名称変更することは、第一に、共産主義者の自覚的結束体である党の本質的意義を否定することであり、第二に、革命運動を勝利させるための党組織の中央集権の原則を無視することにつらざるからであり、第三に、その結果、解党主義の流れに屈服していくことによって労働者人民大衆を帝國主義に売り渡すことになる重大な問題がひめられていくからである。細胞か支部かの問題は、ここでもやはり、翻訳上の問題などに帰せられることでは絶対にならないのである。

自覚的・有機的結束体の表現としての「細胞」

細胞という名称のなかに表われているレーニン組織論の本質的問題は、資本制生産の本質的矛盾を認識し、労働者階級自己解放のため

衆との関係において党の組織活動の生きた交通をつくりだし、その独自の諸活動が人間の体内と同じように、全国的な結束体として有機的に統一されている機構をつくりあげる必要があったからである。しかも、このような党の基本単位の全面的な有機的統一を日常的に保障していく中心軸が、党中央委員会であり、共産主義者の自覚的結束にもとづく細胞を基礎とした日常の独自の活動が党中央委員会を中心軸として展開される組織原則がとりもたず中央集権の原則である。

党組織の官僚化と細胞の死

スターリン主義者たちは、レーニン主義を歪曲することによって、本質的に反革命的な党として自己形成させることによって、労働者階級の前進としての党を擬制的に存在させるために、労働者大衆との生きた関係を打ちきり、必然的に党機構を官僚化させた。その場合に、そもそも細胞のもっている本質的な意義と性格を歪曲し、党中央の指令を忠実に実行する下請機関に転落させ、中央集権主義を死んだ機構にすりかえ、指令の伝達機関に党組織を改組してしまったのであった。したがって、レーニン組織論のスターリン主義的歪曲は、そもそも、細胞と中央の生きた関係を死んだひからびた関係にすりかえてしまったのであり、細胞と呼ぶにふさわしい党の組織活動などは、すでにひさしく忘れ去られてしまったのであった。黨員を党勢拡大の「セルスマン」にしたあげた官本願治による党組織の再編は、すでに、日本共産党の内部において完全に、党細胞のもつ本質的性格を見失わせてしまったのである。

めの当面の任務たる政治権力の獲得を達成するために共産主義者の党への結束が不可欠の手段であることを根底からとらえた共産主義の自覚的結束体たる党の日常的諸活動の組織単位が細胞という名称で呼ばれることにある。すなわち、共産主義者が党に結束して日常の組織活動を展開するとき、外的に強制された規律に頼ることなく、共産主義者の自覚にもとづく内的規律にもとづいて党のための闘争と党としての闘争の有機的統一をはかっていくことがその前提である。

そして、実体的には職業革命家の集団を軸に労働者階級から相対的に独立した党組織の存在によって、労働者階級の内部のいたるところで労働者を日常的に革命的勝利にむかって組織していく闘争を全面的に有機的に統一させる組織論、それがまたレーニン組織論の核心である。

その場合人民大衆の内部のあらゆるところに配置された党の闘争を有機的に統一させていくための組織的保障、それが一方では、中央集権の組織であり、他方では、細胞の名称を冠せられる党の基本組織の存在である。すなわち、レーニンが人間の身体になぞらえて細胞と名づけたのは、一方では細胞が生きたひとつの機関であって細胞の活動が、たえず自己増殖の過程であるが故に、党の基本組織の活動を展開する上で最もふさわしい名称としてつけたことなのである。

そして他方では、細胞が細胞としてひとつの独立した生命力を有しながらしかも細胞が細胞としてのみ独立して存在することができず、人間の全機関との有機的統一の一部であるという細胞の名称をそのまま党組織の基本単位の名称にすることによって、労働者大

解党主義への道

解党主義とは、必ずしも党の存在そのものを否定する理論と実践をさしていることではないのである。レーニン組織の抹殺、それが、十月革命勝利の組織的教訓の普遍的意義を否定することにつらざるものであるがゆえに、一種の解党主義への傾斜を生みだすものなのである。

日本共産党は、決議案のなかで、「全国的規模での統一戦線の未結成は、反共産主義と結びついた『特定政党』支持の義務づけや、特定政党の政治路線のおしつけによる運動の分散化、セクト化の結果である」といっている。このことはもちろん、スターリン主義運動のもとに労働者人民大衆を組織し、包摂していくための欺瞞的表現であり、十年來の伝統的思考方法であるともいえる。しかし、革命と反革命的の衝突が開始され、労働者人民大衆が自らの闘いを貫徹させるために、自己の選択するべき政治的党派がきわめて現実的に問題になり始め、労働者人民大衆の末端にいたるまで、政治的党派による分極化が進んでいき、革命党がそのなかで勝利をしめることが革命の現実性を現実の革命に転化させるための不可欠の条件をなし始めているとき、「特定政党の政治路線のおしつけによる運動の分散化、セクト化」と強調することは思想的な意味における解党主義を助長させるものだといってもよい。

もはや、いかなる意味においても日本共産党はレーニン主義の党とは異なる反革命集団である。

したがって、このような党機構の内部で、黨員大衆が教育されていくとき、矛盾を拡大させると同時に、総体としては腐敗を極限にまで達せしめるものであろう。

レーニン主義的前衛党を建設せよ

発行日 一九七〇年八月四日

編集 マルクス主義学生同盟・中核派
発行所 前進社

定価 東京都豊島区東池袋二〇六二〇九
一〇〇円